

タイのオトシブミ

タイ。体長：20mm。

Canon 1Ds/SIGMA50mmF1.8MACRO+KENKOC-AF1
2X TELEPLUS / 1/250,F8 / 420EX SPEED LITE 6燈使用



こひやま・けんじ

1942年、東京生まれ。慶應義塾大学工学部電気工学科修士課程修了後、
日本電信電話公社(現NTT)電気通信研究所において、
デジタル無線通信方式の研究に従事。

ワイヤレスシステム研究所所長、NTTアドバンステクノロジ株式会社
専務取締役を歴任し、現在、

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授。工学博士

URL:<http://kohiyama.wem.sfc.keio.ac.jp>

series

昆虫と人間のかけ橋
見えないものを見る歓び

小槍山賢二

no. 024

ゾウムシは、生物界の中でもっとも種類が多いグループである。
オトシブミやチヨキリのように、面白い習性をもつものもいる。
一方、ゾウムシの中には害虫として扱われるものも。
その極限の多様性が映し出す、自然、人間社会、そして宗教とは――。

ゾウムシ：極限の多様性

ゾウムシの世界

ゾウムシ類は、甲虫目ゾウムシ上科の昆虫の総称である。ほとんどゾウムシという名が付いているが、オトシブミとかチョッキリ（オトシブミ科）というような名前が付いているものもある。世界で約六万種いるという。いまだに記載されていない種も多く、おそらく二〇万種はいるのではないかと予想^{〔1〕}されている。日本でも一三〇〇種が生息しているという。日本での蝶の種類が、二三百数十種だから、いかにゾウムシの種類が多いかわかるだろう。ゾウムシの仲間、生物界でもっとも種類が多いグループなのである。極限の多様性をもつ仲間とっていいだろう。小型で目につきにくいのに、驚くほどの多様性をもっている。

ゾウムシ上科の仲間は、文献によってその分類が異なる。それほどわかっていない部分が多いということなのだろう。ゾウムシの世界的権威である森本桂博士の分類によると、わが国のゾウムシ類は、ヒゲナガゾウムシ科・オトシブミ科・ミツギリゾウムシ科・ホソクチゾウムシ科・ゾウムシ科・オサゾウムシ科・ナガキクイムシ科・キクイムシ科に分類^{〔2〕}されている。



ゾウムシの仲間は、小型で、しかも種類がむちゃくちゃ多いので、コレクションにはむかないらしく、他の甲虫に比べ人気がない。人気のない理由は、個人の扱える種類数との関係があると予想していることはすでに述べた^{〔1〕}。その上、ゾウムシは小型で目立たないものが多い。よく見ると、真に美しい造形をしているのだが、小さすぎて肉眼ではそれがわからない。そんなことから人気がない。しかし、最近ゾウムシの愛好家が増え、団体もできた^{〔3〕}。研究者にとつては、未開の分野であり、愛好者にとつては、新種を見つけるチャンスが大きい。私のような写真真屋にとつては、その造形の美しさと多様性がたまらない魅力である。

オトシブミ・チョッキリ

ゾウムシの仲間には、オトシブミ・チョッキリというおもしろい名が付いたグループがいる。いずれも1cmにも満たない小さな虫たちなのだけれど、その生息は、魅力に満ちている。オトシブミ（落とし文）とは、「公然と言えないことを記してわざと道路などにおいておく文書（広辞苑）」とある。落とし文は平安から鎌倉時代に多くおこなわれていたようだ。昔は巻紙に手紙を書いていた。オトシブミには、木の葉を巻いて（揺籃）その中に卵を

産み、その葉を切り落とす習性をもっているものがある。オトシブミのその揺籃が落とし文を連想させることからこの名が付いたのである。チョッキリはどうだろう。チョッキリはオトシブミの仲間なので、オトシブミと同じように木の葉を巻いたり、揺籃を作るものが多いのだが、なかには、チョッキリの名にふさわしい習性をもつものがある。チョッキリとは、はさみでものを切る時の音感を表した言葉である。チョッキリの仲間には、クヌギなどの木の実に長い口を使って穴を開け、その中に卵を産むものがある。それだけなら良いのだが、その後、その木の実の付いた枝の根本を切り落としてしまう（ハイロチョッキリ）。晩夏・初秋に、結構大きなクヌギの枝が散乱していることがある。これを観察すると、必ずドングリが付いている、さらによく見るとそのドングリには、小さな穴が空いているのに気がつくだろう。

ゾウムシはその名の通り、長い鼻（本当は口吻をもっているものが多いグループだ。その目的は、ドングリのような堅い木の実に穴を開けて、その中に卵を産むためであることが多い。その典型は、シギゾウムシだ。シギとは、鳥の鳴のことである。鳴のくちばしのような形をした自分の体長と同じぐらいの長さの口吻をもっている。ファーブル昆

虫記のなかには、このシギゾウムシの秘密がいきいきと描かれている。少し紹介しよう^{〔4〕}。

シギゾウムシは長い時間をかけてドングリに穴を開け、その中に卵を産む。まず、ドングリを詳細に調べて、すでに卵が産まれてしまっているドングリではないことを確認する。長い口吻を使って、ドングリに穴を開けるけれど、熟し方が気に入らないと、卵を産まないで放棄してしまふ。時には、口吻が抜けなくなつて、ドングリに口吻を刺したまま、死んでしまふものもいるそうだ。

動物裁判

Webb weevil (ゾウムシの英語名。元々は、ゲルマン系言葉の web が語源といわれる。web とは、前後によく動いたり、跳んだり、群がったりするものを意味するという。とすると私は、Webb で、wee を検索したわけだ。)を検索すると大量のサイトが見つかるのだが、ほとんどが害虫駆除のものである。わが国でも、ゾウムシといえば「コクゾウムシ」を思い浮かべる人が多いだろう。いわゆる害虫である。どうも印象が悪いのだけれど、害虫というのは、実はおもしろい存在なのだ。もちろん、人間の側から見れば、いない方がよい存在なのだが、虫の立場から見てもみよう。自然環境では、害虫と呼ばれるような環境に出くわす可能性はほとんど

ない。害虫となるのは、まわり中が食料ばかりで、それが突然なくなつてしまふ可能性がある。畑・穀物倉庫のような環境に置かれた時である。そのような環境に適合するのはそう簡単ではない。害虫になつていけるのは環境適合性の高い証拠なのではないかという気がする。害虫の話はすでに書いた^{〔4〕}のだが、最近おもしろい本を見つけた。ヨーロッパで一時期、動物裁判が頻繁におこなわれていたのだそう。動物には、昆虫も入る。その中に、ゾウムシが裁判にかけられた話が出ていた^{〔5〕}。概略は以下の通りである。

訴えがあると、裁判所はゾウムシに出頭を命じる。出頭しない場合(出頭するわけではないのだが)補佐人・代訟人が任命される。弁護人は、ゾウムシがブドウを食べるのは、神の法・自然法で是認されていると主張する。これに対し住民の弁護士は、動物は人間の利益になるように作られたのである、かれらは、人間の権利を侵害する権利はないとする。ゾウムシの弁護士は、たしかに、人間は動物の上に立ち、それに指令を与える権利はあるが、罰したり禁止したり破門したりする権利はどこにもない、と主張する。裁判官の判定は、ゾウムシの所有権をみとめ、適切な土地を与える。



この奇妙な制度は、自然に対するおそれから征服への変換、自然宗教からキリスト教への変換の時期(二一―一五世紀)に生まれたという。日本において、このようなことが起こらなかったのは、仏教の思想によるところが大きい^{〔6〕}という。

仏教においては、古来、「人間はたとい生類の筆頭であっても、その仲間であり、その本質的な相違はない」と考えられた。もちろん輪廻の思想もそれと関連している。

動物裁判という事実は、我々に、自然と人間の関係・宗教の力を鮮やかに見せてくれる。そして、宗教そのものも、それが生まれる土地における「自然」の性質に強く影響されるのではない。熱帯アジアのような、自然の回復力の強い地域と、回復力の弱い中東・ヨーロッパでは、自然に対する感情が異なり、そこから生まれる宗教の性格が異なるのは当然なのだろう。

参考文献

- 1.九州大学博物館 http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/INSECT/19/19_1.html
- 2.林匡夫、森本桂、木元新作、「原色日本甲虫図鑑Ⅳ」、保育社
- 3.ゾウムシネットワーク(WWN) <http://133.51.59.33/index.html>
- 4.フーブル、「昆虫記」第13分冊「岩波文庫33-920」: 118頁
- 5.池上俊一、「動物裁判」、講談社現代新書1019: 93頁
- 6.池上俊一、「動物裁判」、講談社現代新書1019: 219頁